

名誉会長故末次勲先生を偲んで

日本レンゲの会 専務理事・事務局長 佐藤 芳博

2001年4月、みどりの日と穂高でのレンゲまつりの連絡を申し上げた時、元気な声をお聞きしたのが最後となりました。自然を生かした食糧生産と国際交流に、生涯を捧げられた末次勲先生に心より敬意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

初めてお会いしたのは、1986年5月3日東京台東区の区民会館で「レンゲと地域活性化」をテーマに9開かれた国際レンゲシンポジウムの時でした。海外パネリストもおられましたので、レンゲに関する著書も多く語学堪能な末次先生に司会をしていただきました。

その日の懇親会で、「私はベジタリアンですから、肉は食べませんでした。菜食主義といっているいろいろあって、肉・魚を食べない人から驚きは果物ミルクも口にせず穀物野菜のみで生きている人まで様々なベジタリアンがいます」と話されました。「慣れぬれば菜食主義も苦にならず豆類豊かなインドのメニューは」(回顧歌集末次勲より)などインドの菜食主義を多くの歌で綴られております。

1989年4月27日から5月5日ま

での日程で派遣されたレンゲ学術交流第二次訪中団では、団長としてご尽力いただきました。その時には「喜寿をすぎ異国に遊ぶ健康と友に恵まれ余生豊かに」(同書)と詠まれています。

「日本レンゲの会会報25号」(1996年4月20日)では「休耕田レンゲで活かせる地の恵み」「レンゲ草有機農法の花とせよ」「年毎に増える休耕田にレンゲ草次の世紀の光求めて」「休耕田レンゲの花で山里に光かがやけよ平成の世に」とレンゲ賛歌をつくられております。

先生からは、お役人という感じを受けたことは一度もありませんでした。コンヒカリの普及にご尽力されるなどの農事試験場でのお仕事も常に学者としてより良きものへの探求の日々であったと聞いております。インド・デカン高原を始め20数カ国での技術協力の際にも、その時々の歌に残されているように、常にその土地の人々の習慣・信仰を尊重し、暮らしの中に溶け込んで地域の実状にあった支援をされたと聞いております。そのことは「特に末次先生は、ものすごく尊

敬の的で、マイソールの大学へ行ったら、マハトマ・ガンジーとネール首相の写真、その時の大統領の写真、その次に末次さんの写真と4枚額にかかっている、偉い人だというんですよ」（「国際農林業協力情報」Vol 13 No.2・3 1990）との言葉に端的に表されていると思います。

南京宣言（1989年4月30日）では、先生のインド・デカン高原をはじめとする世界各地での協力の経験に基づき、「世界の人口は激増し、人類の食糧事情はますます深刻化しつつあるが、人類生存の基盤を成す耕地は限られており、その耕地は程度の差こそあれ、まさに汚染され破壊されつつある。耕地を守り良質な農産品、酪農品の生産量を高めるため、

各国の事情に適合した方法でレンゲ栽培を推し進めていくことは、極めて重要な施策である。」と第一項目で宣言しました。この考え方は、今でも日本レンゲの会に受け継がれ活動の基本となっています。このような考え方で生産していれば、狂牛病問題も起きなかったのではないのでしょうか。当会の運営にあたって、物心両面から多大なお力添えをいただきました。そのご厚情に深謝申しあげ、末次精神にもとづきレンゲの普及で安全な食糧の生産と心をより豊かにする運動を今後とも拡大していくことをお誓い申し上げ、お別れの言葉といたします。

